

じゃんけんで決めても  
区理事選出方法の移り変わり  
形式的となった対立候補  
思わぬ一騎打ち  
候補が得られない  
国際会長選挙  
藤井寛敏さんの場合  
国際役員に必要なキャリア

2011年4月30日 東日本区1998~2011 ヒストリアン 吉田 明弘

### じゃんけんで決めても

キリスト教国の米国で生まれたサービスクラブは、議決についての考え方が、プロテスタント教会の影響を受けているように思います。

プロテスタント教会では、教派によって、直接民主主義、間接民主主義などの違いはありますが、あることを決める場合に、決められたルールに従って、採決して、多数決で決したことは、1票差であるうと「神の意志」と考えます。これには、他者の知恵に敬意を払い、少数派の意見にも耳を傾け、熟慮するということが前提となります。

どうしても決まらない場合に、クジ引きをしても、それが「神の意志」となるのです。

以前、ワイズで役員をじゃんけんで決めたのが不真面目だという意見がありました。これもクジと同じですから、考え方としては、あり得ます。ただ、じゃんけんには、勝ち負けの意味がありますから、役員を決める場合などは、クジ引きか、コインのトスの方が、抵抗がないように思います。

### 区理事選出の移り変わり

ワイズダムでは、役員任期は1年が原則ですから、毎年、組織の各レベルで役員の選出が行われます。区理事も同様で、選出方法には、時代によって変化がありました。

### 太平洋戦争前

前にも書きましたが、区理事を International Director (国際理事) と言い、区の代表であるとともに国際の役員であった時期がありました。

太平洋戦争開戦前の日本区の区理事は、奥平光さん(1932-1937年・神戸)、田中章夫さん(1937-1938年・神戸)、五十嵐丈夫さん(1938-1941年・東京)でした。3人ともその年の国際大会において、国際理事に指名されたとの記録があります。当然、事前に日本区内で候補として推薦したのですが、そのことを記した資料はありません。この時期、区理事名で発信した文書も残されていません。

これは、私の想像ですが、当時、日本で国際協会に加盟していたのは6クラブでしたから、クラブの中心人物は互いに顔見知りで、奈良傳大阪YMCA主事(1938年から神戸YMCA総主事)を中心にして、互選で決めていたのではないのでしょうか。理事は国際協会理事として国際に対する窓口として機能し、区内の連絡・調整・事務は、奈良傳主事と、YMCAスタッフが担当していたように思います。3理事とも極めて高い英語の使い手だったそうです。

## 終戦後

日本区が国際協会に復帰をした1947年に国際理事に奈良傳主事が指名され、1952年まで、5年間、再任されました。戦後の復興期、まだ会員に余裕がなく、YMCA主事であり、人脈のある奈良さんが務めるのが最適だとの判断が、内外ともにあったのでしょうか。区書記が任命されました。区会計は、国際会計代理とされていました。国際協会が区の会計も管理する体制だったようです。

1952年に就任した尾形繁之さん(大阪)が、戦後初の会員の区理事でした。この年5月に行われた京都日本区大会で、「日本区理事候補者を国際大会に推薦する件」が議決されています。これが、8月のカナダ・バンフの国際大会で正式に決まりました。

尾形さんは、高等小学校を中退し、繊維会社で働きながらYMCAの夜間学校で学び、先輩の影響を受けて勉学の道に進みました。YMCAの奨学金で京都大学を卒業し、大阪クラブのチャーターメンバーになった時は大学教授でした。大阪YMCA理事長を務め、YMCAが育て、YMCAを育てた人と言われました。

会員区理事への円滑な移行には伏線がありました。前年の1951年の金沢日本区大会で、西部3分割と西日本副区の設置を決め、尾形さんが副区理事に就任していました。当時の交通手段、通信手段から、一人の区理事が全国を把握するのは難しいことから、日本を東西に分け(領域は現在の東・西日本区と同じ)、理事の出ない方に副区を設けて副理事を置く制度でした。これは1952年に中断しました。

1965 1966年度までは、理事は、2年間務めました。

1962年のカナダ・バンフ国際大会において、区理事は、それぞれの区大会で選挙することになりました。正式には国際大会の直前の理事会(国際協会を統括・執行機関)で国際理事になり、任期は9月1日からの1年間でした。

日本区では、1967年から東副区と西副区に分

かれ、両副理事が1年ずらしの2年任期として、2年を終えた副理事が自動的に区理事に就任する方式になりました。

この時代の『日本区内規』では、理事は、区大会1カ月以前に元理事若干名、その他から若干名、都合5名の選考委員を指名し、この委員が区大会議場に候補者名を提示して選挙することになっていました。

## 新定款による選挙

1974年の『国際憲法』施行に伴い、『日本区内規』が、『日本区定款』となり、新しい区役員選出規則が、概略、次のように定められました。

区理事候補には次期区理事が、次期区理事には、次々期区理事が自動的に繰り上がる。次年度の次々期区理事の候補者の人選は、役員候補指名委員会では準備し、代議員によって決する。複数の候補者の中には、各クラブから最多数の予備推薦を得た者を加えなくてはならない。

複数の候補が立ち、投票することになりましたが、実際には、本人が区理事になることを承諾している、本命以外は、形式的な対立候補でした。

第27代理事の山田利三郎さん(東京西)は、自身が候補となった時に、対立候補がいて、代議員の郵便投票があったことを記憶しています。その山田さんが、理事であった1982年には、3人の候補を立てました。私は、その年度、区書記だったので、山田さんに随行して、候補になっていただくために依頼に行きました。この方は辞退された後、食事に誘っていただきましたが(逆響応というべきでしょうか)、そこで山田さんが強引に頼んで候補になっていただきました。

メモによりますと、1982年10月15日に選挙公報と投票用紙を代議員に郵送、11月30日投票締め切り、12月3日に返送された投票用紙を東京YMCAで開票。立会人は、佐藤邦明(東京むか)および片岡健彦(東京)両元区理事でした。当選したのは、第29代理事となる田中真さん(東京)でした。

対立候補を立てて、選挙を通して選ばれるという定款は、間違っただけではあるとは思いません。しかし、候補者が揃わずに、最初からやれない人を無理に候補に仕立て、そのことを知らない人が投票することには、あざむく感じがありました。

## 形式的となった対立候補

当時のYMCAの役員選挙でも対立候補を立てる方式でした。東京YMCAの施行規則では役員定員の2倍以上の候補を立てることになっていました。これは、容易なことではありませんでした。ある年の常議員選挙で、役員選考委員会は、大阪から転勤してきたばかりの大物に候補になることを頼みました。常議員会議長に就任してもらうことを含んだ起用だったのです。快諾を得たのですが、結果は、本人も周囲も当選を考えもしていなかった無印の若い人に票が流れて、あえなく落選。幸いに推薦の枠があったため救われました。選挙が機能したともいえますが。

私も若い頃に、YMCAセンターの委員の選挙で落選した経験があります。「落ちる覚悟で」と言われて候補となったのですが、それは嫌なものでした。「それにしても票が少な過ぎる。あいつも入れてくれなかったのでは」と思って、しばらく落ち込みました。

日本区においても、1982年の前後は同じようなことが行われていたのではないのでしょうか。

## 思わぬ一騎打ち・・・仙台大会の記憶

変化が起こったのは1983-1984年度、田中眞さん（東京）が理事の年度でした。2人がクラブ推薦されました。田中区理事は元々、正々堂々と戦うべきだという持論でしたし、囃したてて皆を盛り上げることが上手でしたから、わが意を得たりということだったでしょう。

選挙というものは、人を興奮させるものです。候補者が、京都と大阪の在住、大学は同窓とあって、本人よりも周囲が過熱してしまいました。各クラブの関心も高く、「どんな人？」と聞くと、

それぞれヒキがありますから、一方を褒めながら、どうしても「それにひきかえ」という話になりました。どちらかが、上京（東京）し、親しいワイズメン宅に寄ったら、「選挙運動に現れた」と、その日のうちに噂が広がりました。

この年は、ほとんど過去に例のない、代議員会で投票して、決することになりました。

1984年6月1日、仙台第二ワシントンホテルの代議員会会場のレインボーホールは、異常な緊張感で張りつめていました。「15時10分定刻、議場閉鎖」。重い木製の扉が閉まりました。

投票の結果、西崎照一さん（京都めいぶる）が当選しました。

今回、このことを確認するために、代議員会の総合司会を務めた上谷喜謙さん（当時東京）と大会実行委員だった清水弘一さん（仙台青葉城）に当時のことを聞きましたら、異口同音に言ったのが、あの議場閉鎖した時の扉の音でした。それほど、強烈な印象だったのでしょう。

主義、主張で争うわけでないので、選挙は難しいなと思いました。田中理事は、どう感じたのでしょうか。『日本ワイズメン運動史』の「歴代理事の回想」に、「次々期理事選出に関し、日本区史上、かつてみない活発な選挙運動が展開され、そのありようについて、幾多の問題を残した年でもあった」と述べています。

私にとっては、後味の悪いものがありましたが、落選となった候補が、その後もまったく屈託なく堂々と振舞っておられたのが救いでした。

## 選挙から調整に

これ以後、日本区では、複数候補は出ていません。たまたま、複数の候補が推薦されても、辞退したり、指名委員会が調整したりで、一本に絞られ、代議員会で承認する形になりました。当時は、東西交互で区理事が出るようになっていましたから、譲ると2年待つことになりましたが、特に問題が表面化したことはありませんでした。

東・西日本区になってからは、定款を、「指名

委員会は、候補者が2名以上の場合は、選挙の要否を協議し」としました。選挙を回避したい意向が見えます。

## 候補が得られない

実際には、候補者が得られにくいことに問題が移っています。クラブから、指名委員会に推薦があっても、候補となることを受諾しない場合が多いのです。

これは、区理事の負担が重くなっていることも一因でしょう。東・西日本区になったことよって、区のクラブに対する指導がきめ細やかに行われ、親近感が増した半面、クラブや部が、理事に対して、細やかな対応を求めるようになってきているからです。あるいは、あまりに組織が肥大化し、しかも緻密になってきているので、そこで自分を発揮することが出来ないと思わせるものがあるのかも知れません。

候補者を広く掘り起こすため、2005年11月の東日本区役員会で、定款8条の変更案(指名委員会の構成を、これまでの直前理事、現部長に加えて、若干名の理事経験者を加えること、指名委員会自体が候補者を推薦出来る)が承認されました。(この案は、代議員会提出になっていません)

## 役務が候補者を探す - 役員就任式式文

国際協会が定めた役員就任式式文(1993年11月役員会で修正)は、次のとおりです。

「ワイズ運動において執行役員に選ばれることは大いなる名誉です。他の団体の役員に選ばれるより、はるかに名誉なことです。一般の選挙では役務が欲しいがゆえに立候補しますが、私たちの運動では、役務が候補者を探すことを不文律としています。」

必要な年度に、必要な人が一人だけ与えられるということは、最も効率が良いとも言えます。

## 国際会長の選挙事情

ワイズメンズクラブ国際協会における主体は、

各個クラブです。国際役員選挙も、区理事の選出と同様、クラブ会長が投票します。

しかし、実情はかなり違います。

毎年、12月の選挙公報と投票用紙が、区事務所からクラブ会長に郵送されます。

選挙公報には、次期国際会長候補者の紹介があります。これは、国際が用意した書式に、候補者が英語で書き込んだもので、無修正で配布されます。自己紹介の内容は次のとおりです。

国籍、生年月日、家族、宗教、職業、学歴、職歴、所属クラブ、所属クラブの概要、ワイズ歴、YMCA活動歴、今日のワイズダムへの考え・関心事、国際会長としてワイズダムのために行いたいこと、どのようにワイズダムを国際的に発展させることが出来るか。

選挙運動は、固く禁じられていますから、クラブ会長は、それまでほとんど聞いたこともない候補者について、この自己紹介の内容と表現力を頼りに投票します。もっとも国政や地方自治体の選挙でも、候補者についてまったく知らないまま投票もしているのですから、それは、いたしかたないことなのでしょう。

国際会長には誰もが立候補出来ます。ただし、所属するクラブが、国際協会に認められていること、世界中のどこかの区理事によって推薦されるという条件となります。候補は、2人以上、3人までで、3人以上となった場合は、国際議員の投票によって、3人に絞られます。ということは、かならず競合があるということです。

## 何年かに一度は、日本から

2010年8月現在の世界のクラブ数は、1,578クラブです。その中でワイズ大国と言われるのが、インド(547クラブ)、韓国(246クラブ)、デンマーク(155クラブ)、日本(153クラブ)、米国(113クラブ)です。かなりいびつな形です。これらの大国が、自国のことのみを考えると、多数決民主主義の悪い面が出てしまいます。

世界のワイズもさまざまですから、メンバー数

が1,000人単位で増減したり、国際会費を負担できない成長中の国も、低迷している国もあります。また、日本では考えられませんが、国際的な組織のリーダーになることが、その社会でステイタスを得られるために、国際役員になることに異常な情熱を燃やす国もあります。

このような中で、米国に次ぐワイズの伝統があり、クラブ数でも組織でも安定し、献金での国際貢献も高く、状況に柔軟な対応する余裕もある日本が、何年かに一度、国際会長を出すことは、ワイズダムの健全な発展のために、期待されている面もあるのです。

### 藤井寛敏さんの場合

2010年に第85代国際会長に就任した藤井寛敏さん(東京江東)は、1994-1995年の第69代の青木一芳さん(千葉)以来、16年振りの日本からの国際会長です。

藤井さんは、2005年6月に東日本区理事を終えたあと、国際議員(2006-2009年)への立候補を勧められ、当選しました。3年任期の国際議員には日本から、1人または2人が入るのが通例です。アジア地域会長は、アジア地域の区理事による選挙ですから、そこで推されて、2008-2009年にアジア地域会長を務めました。この時、国際事情に詳しいワイズメンによって「チームジャパンアジア」を作り、アドバイスを受けていました。

このチームが、藤井さんに国際会長(2009-2010年)へ立候補することを勧めました。海外のワイズメンからも立候補を勧めるメールが届きました。そろそろ日本から国際会長を出すべきだという意味だと、藤井さん自身は受けとめたそうです。熟慮の末に決意し、区の常任役員会が承認し、正式に立候補しました。

しかし票が届かず、この年度はケビン・カミング(Kevin Cummings・カナダ)が当選しました。

この結果は、本人と大方の予想とも一致していました。藤井さんは、1987-1988年の区CS事業主任、1992-1993年の東部部長以来、区理事と

なるまで、区・地域・国際に縁がなく、自クラブのことに専念していました(普通は、地域・国際の実業主任を経験している)ので、知名度が低かったこと、その前年、日本も推進した国際事務所のジュネーブからプラハに移転する案が否定されるという問題が起きて、日本に警戒感をもつ国もあると思われたからです。

しかし、藤井さん自身も手ごたえを感じ、再度立候補することにしました。東日本区も、横浜国際大会のホストとして名乗りを上げた時期でしたので、今度は本命と推薦しました。そして当選。ご存知のように、横浜国際大会の初日に就任式が行われたのです。

これは、日本にとって、1975年の熱海国際大会における、第50代鈴木謙介さん(当時東京)以来のことでした。

### 国際役員候補に必要なキャリア

区理事選出と国際議員の選出は事情が違います。果実が十分熟すのを待ってではなく、熟す前に国際舞台に押し出すことも必要です。

2006年に、ハリー・M・バラントイン賞を受賞した今村一之さんの経歴は、次のようです。

1972-1973年 日本区書記  
1979-1989年 IBC 国際事業主任  
1983-1986年 国際議員  
1985-1986年 アジア地域会長  
1988-1989年 日本区理事  
1996-1997年 中西部部長

つまり、通常の逆コースなのです。

国際では、不思議に感じるほど、誰でも挑戦できるように門戸を開いています。それだけに推薦する区理事を信頼しているのでしょう。

国際経験の豊かな人によると、国際議員の場合、本人の人格が一番大事で、部長や区事業主任くらいの経験はあった方が良いと言われます。

若い人を国際に出すためには、部長や事業主任を若返らせることが重要です。部長のクラブ輪番があって、それは、当該クラブを刺激する効果が

ありますが、もし適当な人がいない場合は、あまりにこだわらずに、人材を抱えるクラブに早く回すことも必要だと思います。

## あとがき

区の事務所で、鈴木健次事務所に声をかけられました。「小説なんて読みますか」。伊集院静の『浅草のおんな』を借りて帰りました。主人公は浅草の居酒屋の女主人。店に来る客や従業員を中心に店から半径 1km で起こる出来事でした。

この女主人が、三社祭の女御輿を担ぐよう勧められて、ヨソ者の自分でよいのかと、迷っていたときに常連が言ったことば。

「御輿は町の衆にとって大切なもんだ。それを担ぐ人を選ぶのは当たり前だ。自分の器量が御輿を担ぐんじゃないで、御輿が、そいつの器量を望んでくれるのさ」。鈴木さんが読ませようと思ったのは、ここかな、と思いました。

前にも書いたことがあります。故佐藤邦明さん（東京むかで）は、1977 - 1978 年度区理事を務めた時は、船会社の社長でした。その佐藤さんが、「社長の椅子の後の壁に舵輪がかけられていて、金属のメダルに『誰もがリーダーになれるわけではない』と刻まれている。見るたびに身が引き締まった」と言われたことがありました。

門戸が開かれていても、本人にその気があっても、誰もが国際役員を出来るわけではありません。やはり、条件のあった人に活躍してもらわなくてはなりません。

勉強ができる学生が多く、野球は弱いことで有名な大学があります。その野球部の前監督が強化策を語りました。「勉強が出来て入学してきた学生に野球を教えるよりも、高校で野球ばかりやっていた子に勉強を教えて入学させる方が早い」。

樫村好夫元理事（富士）とゆっくり話したことがありました。われわれが知らない国際事情などの知識があるのは当然として、個々のクラブの人間関係にまで通じているのに驚きました。樫村さんに限っては、「そうですか、そうですか、いい

じゃないですか、やりましょう」というタイプだと信じていましたから、裏切られた思いでした。理事を務めた人の情報は凄いです。

しかし、国際議員にこれを要求するのは無理。国際の舞台でもまれながら、必要なものは身につけていったら良いと思います。

## あとがきのあとがき

5 月末をもって、『ヒストリアンズ・ビュー』を終わりにいたします。13 か月、お読みいただきありがとうございました。

ヒストリアンの任期は、6 月末までありますが、どうせ、最後の号でもミスをやらかして、その後始末のために、次の舞台の幕が上がった 7 月に、前の役者が後始末している図は、なんともみっともないので、「座長が幕引く、田舎芝居」ということにします。

監修の概念を超える監修をしていただいた、区書記・IT アドバイザーの田中博之さん（東京）と文献委員長の村杉克己さん（東京北）には本当に感謝しています。こちらは自分の好きな時に書いたわけですが、どんなに忙しい時でも折り返し返信をいただきました。横浜国際大会開催、東日本大震災救援の、まさに東日本にとって未曾有の超多忙の年にもかかわらずです。毎号 20 か所ほどの指摘をいただき、もし監修がなければ、自らのミスで、数号で沈没していたことでしょう。岡本尚男さん（京都キャピタル）からも、毎号、校正と助言をいただきました。

私自身は、知識の蓄えをもたないのですが、不思議に誰が何をご存じかの勘はよく、多くの方にメール一本で教えていただきました。ありがとうございました。

『ヒストリアンズ・ビュー』を発信して、しばらくした時にいただいたメールに「暇をもらってあましておられるようですね。よろしかったら、ワイズで、何かの仕事をお世話します」とありました。十分、にが笑いをさせていただきました。